

インターンシップ活動報告書

国際協力NGO CYCLE BEYOND THE BORDERS

山下 純乃

活動先について

活動団体名：Cycle Beyond the Borders（以下CBB）
活動地：カンボジア コンポンチャム州
活動期間：2019年4月1日～2020年1月11日
活動人数：日本人インターン生1～7人（時期による）、カンボジア人スタッフ8人
活動内容：フリースクールにて日本語・英語教師、スクール運営、住み込みプロジェクト運営など



CBBについて

すべての子ども達に教育への
フリーなアクセスを！

カンボジア王国は東南アジアのインドシナ半島南部」に位置する国家です。人口は1,513万人で首都はプノンペンです。国民の多くがクメール語を話し、仏教を奉ずるカンボジア人です。

カンボジアの2017年度の就学率は、小学校が約95%、中学校が約46%、高校が約13%と、年齢が上がるにつれて教育水準が低くなる傾向にあります。小学校は卒業することができても、多くの子どもたちが中学校・高校を卒業せずに退学してしまっているのが現状です。

その背景には、内戦時に教育関係者の大量虐殺が起こったこと、親世代の教育への関心が低いこと、家庭の経済的事情により家業農業の手伝いをせざるを得ないこと、家計を助けるために出稼ぎに行くことなどがあります。

そのため、国内でも発展している都市部と、農村部との間に格差や貧困が生まれ、大きな問題になっています。すべての子どもが学校に行くことは可能だけでも、家庭の事情で学校を辞めざるを得ない子どもが、まだカンボジアにはいます。

そんな貧困地域で、子どもたちが安心して勉強ができるように、CBBは無料で日本語・英語教育を提供しています。お金がない子どもでも日本語・英語を学ぶこと、外国人と交流をすることで将来の選択肢・価値観が広がります。また、身に付けた語学力が収入に直結し、貧困から脱出できます。

将来、CBBで教育を受けた子供たちから、国や地方の行政や教育機関を支える若者を輩出し、「カンボジア人自身の手による支援」ができるように、カンボジア人スタッフの人材育成にも力を入れています。

目指せカンボジアの『松下村塾』！！！！

インターン参加にあたって

私は2019年の3月に、大学を卒業して、4月から新社会人としての第一歩として、カンボジアの国際協力NGO CBBでインターンを始めました。

私が最初にカンボジアを訪れたのは、2012年。高校一年生の時でした。カトリック教会のグループが主催するスタディツアーに参加したのが始まりです。

「発展途上国を自分の目で見てみたい」という動機からでした。

水上村で暮らす人々、ポルポト政権の惨劇、足元に広がるゴミ、しかしそんな光景とは対象に、子ども達の目は輝いてとても幸せそうに見えました。何もかもが新鮮で、衝撃で大きな感銘を受けました。

そのツアーでカンボジアに魅せられた私はカンボジアにハマっていきました。大学在学中に、カンボジアを訪れる中で「いつかカンボジアで福祉の仕事がしたい！」という思いが湧いてきました。

現地で働くための情報をいろいろと探した結果、たどり着いたのは新卒でのインターンシップという選択肢でした。

教育分野は初めて入った分野でした。

「国を作るのは教育」という言葉を知り合いの神父様からよく聞いており、発展途上国における教育の役割の重要さをいつも海外に行くたびに感じていました。CBBの理念の中にも「国を担う人材の輩出」というものがあり、私はこの言葉にすごく共感しました。

CBBでのインターンでは、CBBスクールに来る生徒たちが自分の将来に希望を持って勉強し、勉強したことを将来につなげていけるようにサポートすることを目標に臨みました。



過去の支援実績

① 自転車支援

CBBの活動は、カンボジアの農村部で、家と学校までの距離が遠いため学校に行きたくても行けない子ども達に自転車を支援し、教育へのアクセスを提供することから始まりました。自転車があるだけで、子ども達は勉強と家事の両立ができ、「退学阻止」につながります。また、遠くの高校にも行けるようになるため、進学をサポートにもなります。

CBBでは2014年までに、延べ300名へ自転車を支援しています。



③ 大学進学支援

カンボジアも日本同様、学歴の有無により、職業選択の自由が大きく左右されます。高卒では小卒や中卒と大きく給料が変わらない現実があります。差が出てくるのは大卒からです。高卒だと就けない銀行員やオフィスのワークの仕事もできるようになります。もちろん給料も大幅に上がるため、家族から1名でもそういった仕事に就く子どもが出ることで、家族全体が貧困から抜け出せるチャンスがあります。大学進学をより現実的に捉えてもらうために村から“ロールモデル”を出すため、2013年から支援が始まりました。貧困の高校生を対象に、一次選考をCBBが、二次選考をカンボジア大学側が行い、奨学金を提供しています。近年では、プノンペン・メコン大学日本語ビジネス学科との提携も行われており、多くの学生が大学で日本語を学んでいます。また、CBBのスタッフとして通訳や高校生向けに、YouTubeを使ったオンラインスクールで授業も行っており、多数の学生が活躍しています。今年度は、より支援を必要としている人に提供をするため、カンボジア少数民族が多く暮らすモンドルキリ州から4名の奨学金生を輩出しました。

② CBB フリースクール

CBBフリースクールは、カンボジアのコンポンチャム州のチュンプレイ村というところにあります。CBBの支援地域であるいくつかの村（貧困地域）に住む子ども達への日本語・英語教育を無料で提供しています。

現在までに約50名を超える日本人・外国人インターン生が農村部にあるスクールに滞在し、日本語・英語教師として授業を行っています。現在までに500名を超える生徒がCBBスクールで学びました。生徒は全員カンボジア人です。授業はカンボジアの母国語であるクメール語を使って行います。

外国語を学び、子ども達の将来の職業選択の幅を広げるために、日々楽しく日本語を教えています。

私の活動について (業務内容)

① 日本語教師、スクール運営

1日約20名から30名の生徒に、1コマ1時間の授業を5コマ行いました。教える内容は、生徒の習熟度に合わせて、ひらがなから文法まで幅広く教えました。授業や生徒とのコミュニケーションはクメール語を使って行いました。

生徒は6歳から18歳までの小中高校生です。生徒は、午前中に公立学校へ行き、午後にCBBスクールで学びます。

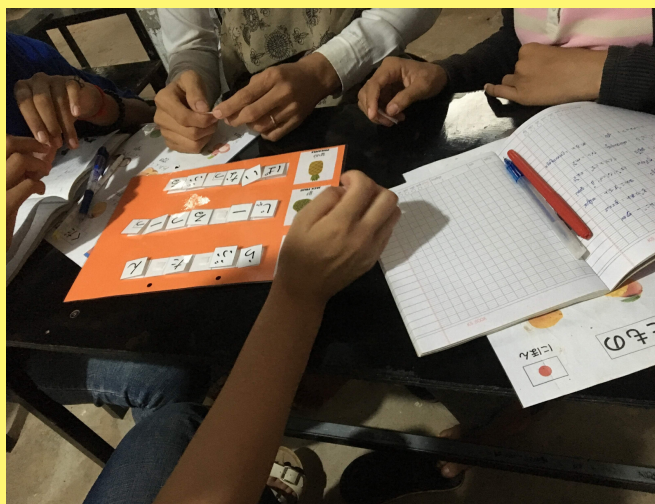
インターン中、オリジナルの日本語教材を作ることに力を入れました。特に生徒が自発的に学べるように障害児への特別支援教育で用いられる「マッチング」の様式を参考に教材作成をしました。生徒の中には、文字と発音の一致が難しく、どちらか一つしか覚えられない子もいたため、繰り返し取り組むことで、読み書きができるようになり、言葉を覚えることができました。



CBBスクールには長年、多くの生徒が途中でスクールに来るのを辞めてしまうという問題点があります。理由として、インターン生の入れ替わりにより来るのを辞めることや、日本語への飽きなどがあります。インターンを始めた当初から「数人の生徒を半年間継続する」という目標を掲げました。インターン中、来なくなる生徒もいましたが、生徒との関係作りにも努め、一部の生徒が6か月間継続してスクールに通うことに成功しました。

日本人インターン生同士で、授業チームを作り、長期インターンとしてリーダーを務めました。スクールの現状や、授業の進行具合、時には問題点を話し合い、スクールの問題解決・改善へ向けて尽力しました。

また、月に一回、イベントを企画し、生徒とともに七夕祭り、石けんづくり、運動会、山への遠足なども行い、大成功でした。



② インターン生対応 スタディツアー引率

2019年6月頃から、新しいインターン生の対応を担当するようになりました。新しいインターン生へのメールの対応、オンライン面接を担当し、インターン生のやりたいことと、CBBが行っていることのマッチングを意識し、相手からたくさん情報を引き出すことを目標に行いました。また、現地インターン生として現地の状況や活動についてイメージしやすいように伝えるように努めました。

現地では、インターン生の空港ピックアップやインターンに関する研修も担当し、インターン生が安心して生活できるようにサポートに回りました。

7月から9月にかけて計11名の日本人学生スタディツアーの対応、引率を担当しました。メールの対応をし、ツアーのプランを考え、航空券や現地での生活のアドバイスをを行い、安心してカンボジアに来ることができるように努めました。



現地ではピックアップからはじまり、プノンペン市内のキリングフィールドやトゥールスレン虐殺博物館を訪れたり、シェムリアップに行ったりと、カンボジアの各所へ行き案内をしました。村では、近くの市場や小学校、ローカルNGO、ヘルスセンターなどの案内を担当し、短い時間でもより充実したツアーになるように努め、参加者の方からも満足したとの声を頂きました。

2019年8月には、約50名ほどの学生団体がスクールの見学に来られました。その際には、村の案内役を任せられ、バスに同行し、市場や学校等でガイドを行いました。

インターン対応やスタディツアー引率でいろんな人と関わる中で、初対面の方でも臆することなく話することができる力が付きました。



③住み込みプロジェクト

● 当プロジェクトの意義

このプロジェクトでは、小学校、中学校、高校を退学した子どもたちが、CBBで日本人インターン生と一緒に生活しながら学校に復学することを目指します。

学校を退学する理由として、親の借金があって働かなければいけない、学校に行くための自転車がない、など家庭の貧困が挙げられます。そして、彼らが勉強をしたい、という意志はあるにもかかわらず、家庭のために学校を辞めざるを得ない状況にある子ども達があります。

学校を退学してしまった子どもたちは、工場や建設業で働きます。お金が理由で退学をしてしまった彼らが就ける職業は、低賃金の職業ばかりです。これではいつまで経っても彼らは貧困のサイクルから抜けだすことができません。



「学校に行きたい、勉強したい。
でも・・・」

という「本人の意志だけではどうすることもできないこと」を手助けするため、CBBは、退学した中高生を対象に復学支援・大学進学支援プロジェクト＝「住み込みプロジェクト」を立ち上げました。

子どもたちの想いを実現させ、力仕事しかできなかった彼らの将来の可能性を広げることができるのが、この「住み込みプロジェクト」です。また、カンボジアでは母語以外の言語を話すことができることが収入に繋がります。CBBと一緒に日本語や英語を学ぶことによって彼らの将来の可能性、選択肢をより広げていくことを目指します。

● 目標

一番の目標は彼らが「学校に復学すること」。

カンボジアでは、就職する際に学歴が重要視される傾向にあるため、きちんと学校を卒業できなければ、就きたい職業があっても就くことができません。また、学校に通うことによって、彼らの知識や見分が広がり、より広い視点で物事を見る、考えることができるようになります。

学校に復学することが第一の目標であるので、日本人側で子どもたちの勉強面、学校生活での悩みなども相談に乗り、復学後のアフターフォローもきちんと行います。復学後は、高校3年生（12年生）を終え、高校卒業試験合格を目指していきます。卒業後は、プノンペン市内の大学や日本語学校に行ったり、プノンペン市内の日系企業での就職を目指します。多くの住み込みスタッフが、将来日本働くことを夢見て日本語の勉強を頑張っています。



また、彼らがCBBで日本語（英語）を学びある程度話せるようになったら、「カンボジア人自身の手による教育支援」を実現させるために、CBBスクールの先生として子どもたちに日本語（英語）を教えるようになることを目標にしています。そうすることで、日本人インターン生がいなくても、彼らが日本語を教えることで、生徒がスクールを離れることなく、スクールを継続させることが可能になります。

今後の展望として、夏休み期間に行われるスタディツアーの村案内や、ホームステイの受け入れなどがあり、より日本人とふれあい、日本語をアウトプットする機会ができればと思います。



・ 住み込みプロジェクト 活動内容

① 住み込みスタッフ探し

・ CBBの支援地域の村に行き、村長さん・近所の人・生徒に聞き込みを行い、退学者を探します。

・ 退学者や保護者へのインタビューを行い、家庭環境や、本人の復学への意思やCBBに来るかどうかの意思の確認をします。

② 復学支援

- ・ 復学先、転校先の学校との連携を取ります。
- ・ 復学に必要な書類を集め、物品の購入を行います。
- ・ 住み込みスタッフへのケア、サポート、ミーティング
- ・ エクストラクラス（塾）への送り出し

③ 住み込みスタッフとの共同生活

- ・ 日本人インターン生、カンボジア人スタッフが3つのチームに分かれ、昼と夜の料理・炊飯・皿洗い、掃除を分担して行います。
- ・ 生活上の困りごとなどを対応します。
- ・ 住み込みスタッフへの日本語・英語教育（昼、夜合わせ1日2～3時間）



購入型

成立

**カンボジアで中退した中高生の復学を
。日本人学生が応援！**



国際協力NGO CBB

支援総額

1,402,000 円

目標金額 1,120,000 円

④ 家庭との連携

- ・ 月に一回の家庭訪問で、CBBでの様子を伝え、家庭での様子をインタビューします。
- ・ 家庭での環境の変化や家族の様子の変化に素早く気付けるように、家族についてのミーティングを行います。

⑤ 資金調達

2019年9月から10月末にかけて、住み込みプロジェクト運営のための資金調達をクラウドファンディング形式で行いました。目標金額である112万円に、開始から28日で達成し、合計140万2000円の資金調達に成功しました。ご支援頂いたお金は、今後1年間の住み込みプロジェクト運営費や、子ども達の復学費、制服代になります。現在は7人の子ども達が生活しており、3人の退学者が復学することができました。資金調達のために、SNSやnoteでの広報・発信に尽力しました。

インターンを通して学んだこと

① インサイダーとしての 視点を持つこと

カンボジアへは、7年ほど前からスタディツアーや個人的な旅行で何度も訪れている国でした。そのため、カンボジアのことはよく知っているつもりで、現地の雰囲気や人柄に惹かれて、いつかはカンボジアに住み、カンボジアの人達のために支援をしたいと思っていました。

ですが、長らく住んでいる人から言われた言葉は「現地のことを何も分かっていない。お前のいう『カンボジアが好き』は旅行者としての『好き』だ」というものでした。

たった数日、カンボジアに滞在しただけでは、カンボジアの100%のことを知ることができず、アウトサイドな視点しか持つことはできません。この国と本気で向き合うためにはそのような生半可な気持ちではいけないと、喝を入れられました。支援をしたい、という一方的な上から目線の視点で見るカンボジアではなく、もっと現地に入り、インサイダーとしての視点を持てるようになりたいと思いました。

そのためには、自分の目で見たカンボジアだけを信じるのではなく、カンボジアの農村部での生活を通して、カンボジア人との関わりを大切にし、将来自分がカンボジアでなにができるのか考え、カンボジアという国と向き合っていく期間にしたいと思い、今回長期でカンボジアでのインターンをしました。

長期で滞在することで、様々な学びがありました。旅行で行くよりも、カンボジアのよりリアルな部分が見えます。

毎日、火を起しご飯を炊くこと。水のシャワーを浴びること。村の市場で食事をし、買い物をする。魚や鶏を捌くこと。停電、断水。観光客や来客として、大袈裟にもてなされない対等な関係。カンボジア人特有の性格や人柄がとても温かったこと、また時に彼らの性格や人柄に思い悩んだこと。カンボジアの言葉を話し、コミュニケーションを取ること。

現地の人と同じ目線で過ごしていくことで、自ら歩み寄ることで、カンボジアの文化、生活、人柄に触れ、より理解を深めることができました。



②新たな課題点と今後について

現地に入ること、新たな課題点を見つけることができました。それは継続の難しさです。同じことをずっと継続していくためには、仕組み作りとそれを運営していく人材、そして資金が大切だと考えます。

今回、カンボジアで1つのプロジェクトを運営することを経験しました。インターン生同士でプロジェクトを考え、誰が運営しても続いていけるように仕組みを作り、運営のための資金を集め、運営をしていくプロセスを近くで見ることで、NGOの経営、運営の難しさを垣間見ることがありました。インターン生だけで運営されている今のCBBは、時期によってはインターン生が1人もいない時期や人数が少ない時期があります。私が4月に着任した時にも、インターンはおらず1人でのスタートでした。もし、今後住み込みプロジェクトを進めていく中で、このような状況になった時に、果たしてこの人数の中、プロジェクトは続いていくのかどうか、という疑問点が残りました。

また、このプロジェクトの設立目的や運営方法、住み込みスタッフについての情報など、全てを知っているインターン生が帰国した後に、それまでと同じ支援ができるのかどうか、という不安もあります。

その解決策として、文書として仕組みを残して支援を継承していくのもやり方の一つとして大事だとは思いますが、現地に住み、このプロジェクトに寄り添い、子供たちを支えていく人材が必要だと感じました。



そして、その人材に私になりたいと思っています。プロジェクトを設立するだけでは、今後あと長くて7年間続くこのプロジェクトは継続が難しいと感じます。現地で問題になっている外国人による学校建設のその後の問題と同じく、始めたからには責任がついてきます。最後、全員が高校を卒業するまで見届けた後に、このプロジェクトは初めて成功したと言えるでしょう。

プロジェクトを運営していくためには、仕組みと人材だけではなく、資金も必要になります。その資金をどのようにして作り出していくのか、という点も大きな課題点だと感じました。この1年間、CBBは大口ドナーからの支援が絶たれ、経営難の状況にありました。支援を継続させるためには、寄付金だけでは限界があります。NGOとしてどのような収入事業ができるのか、日本の社会から学び、カンボジアでの仕事に還元できるようにしたいと思っています。

9ヶ月間、かけがえのない貴重な経験ができたことをとても嬉しく思います。大変お世話になりました。